

---

# Cyber Arms - Test Ver .

暁ゆうき

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

Cyber Arms - Test Ver .

### 【コード】

N7095C

### 【作者名】

暁ゆうき

### 【あらすじ】

月下の未来都市、二つの影が繰り広げる闘い。

時は未来。文明の進歩は、人間の可能性を高めるとともに、その犯罪までも多様化させまた凶悪化させることになった。

高度に進化したサイバネティック・テクノロジーは、もともと人間の欠損した身体機能を補助するためのものだった。しかし猛烈な加速度で進歩した同技術は医療分野だけの利用にとどまることなく、人間の身体の部位を機械と交換することで、その能力を極限まで高めることを可能にしたのである。それは半ば、技術の暴走と言えなくもなかった。生身の人間には不可能な筋力。感覚器官は知覚機械とリンクし、従来の神経伝達などとは比べものにならない。さらに体内に火 器を内蔵する者まで現れた。

人間を高みに導く技術は、非合法な肉體改造によって徐々に犯罪の温床となつていった。各国の警察機関は増加するサイバー犯罪に対抗するため、様々な手段を編み出さねばならなくなったのである……。

満月を頭上に、果てしないチェイスが続いていた。高層ビルの合間を縫って、得体の知れない巨大な影が、跳躍し、疾風のごとく駆けていた。巨大な影の着地点にあった車は無残にスクラップと化してゆく。ヤツの前に障害物は存在せず、すべて破壊されてゆく。それは、もはや人間の為しえる事ではなかった。

容姿を見ればなおさらである。成人の数倍はあろうかという体軀に、黒ずんだ鋼鉄のような肉體。目は真つ赤に輝き、悪鬼羅刹も怖気づく形相をしている。悲鳴をあげ逃げ回る人々、車を捨てて走り出す人々に目もくれず、ただただ逃走を続けている。

一方、それを追うもう一つの影。

それは前者とは対照的な、スリムな青年である。

だがこれも人間離れた脚力で、例の巨漢を追跡している。

「でかい図体のくせに、なかなかすばしっこいな」

両者の距離は一向に縮まる気配を見せない。二つの影は長い長いチエイスを行いながら、止まることも、息を切らすこともない。

青年は話す相手もないのに、何かを口走った。

「ナギサ、解析はまだか」

アナライズ

しかしこれは決して独り言ではない。無線によって、彼のパートナーである一人の女性の耳に入っているのだ。間も無く若い女性の声で返答が返ってきた。

「パーツの熱量と、性能の概算数値で解析中。該当データ予測不能。でもパターンはオルフェウス社のレグに酷似している。ブーストによる緊急接近でのラグは0.08秒と推測」

「サンキュ！ 俺の目を通した動画は引き続き転送するんで、解析続けてくれ」

「了解」

追跡を続ける青年の元に、再びナギサからの連絡が入る。

「イツ、ACCTの部隊がその先で防衛線を敷いているみたい」

「ようやくおいでなすったか」

「距離、そこから300m。機動兵器を3体確認。戦争みたいね」

「足止めくらいはして欲しいところだな」

やがて、対サイバネティック犯罪者部隊（ACCT）が肉眼で見えた。巨躯の男を射程圏内に捉えたらしく、有人機動兵器の腕から機関銃が発射された。それと同時に一斉射撃が始まる。だが、けたたましい音とは裏腹に、その弾丸がヤツをかすめる気配はまったくない。

「ガアアツ」

男は咆哮し、ACCT部隊の目前に迫った。

男に接近され、機動兵器のうち一体は頭をつぶされ稼動不能とな

り、別の一体は腕をもがれた。

生身の隊員たちはどうすることもできず、悲鳴をあげながら逃げ回る始末である。隊長を思わしき人物だけが、ひるまずに怒号を飛ばしている。

だが、この一瞬、少しの足止めが功を奏したのだ。

「いまだッ！」

後ろから飛び込んできたイツが、ついに巨漢に追いついたのである。しかしながら、巨体の反応は予想以上に素早い。イツの蹴りは空を切った。身を翻した巨体はもう逃げようとはしなかった。もぎ取った機動兵器の腕を振り回し、イツに叩きつけた。だが、これはイツの拳で碎かれる。

ここからは格闘戦になった。イツの拳が顔面にヒットすると巨体の男は多少ひるみはするが、それほどのダメージを受けてはいないようだった。以降、両者の攻撃は空振りが続いた。

A C C T部隊は、攻撃がイツに当たるのを避けるため、攻撃を中断している。

イツは自分の方が小柄であることを活かして、その懐にとびこんだ。これは絶対的有利と思えた。

しかし次の瞬間、大男の腹部が大きく開き、そこから銃口が顔を覗かせた！

「内蔵火器！！」

イツはすぐさま両腕で防御体勢をとると、後ろに飛びのいた。だが巨漢の男が放った炸裂弾を至近距離でくらい、イツは爆発に巻き込まれた。ダメージを受けてはいるようだが、外見的には服が傷んだ程度にしか見えない。

それでも隙ができたのが仇となり、巨体に攻撃のチャンスを与えるばかりであった。防御体勢のままではあったが、敵の強烈なブローを喰らい、さらに連続してストリートを浴びてしまった。相手のアームには特殊な機構が搭載されているらしく、まるで拳が杭を打ち出すかのように、瞬間的に、爆発的な衝撃を生み出した。

イツは大きく吹っ飛んだ。ビルの一階にあった店のウィンドーを突き破って店内にかつとんだ。彼がそこからすぐに出てくる空気は全く感じられなかった。

その間、残ったACCTの機動兵器の機関銃、隊員の様々な武器が巨漢の男に命中したが、彼は全く動じない。効いていないのである。装甲はまるで戦車のものであった。

「ば、ばけもの！」

サイボーグとは何度が戦ったことのある隊員でさえ、そう言うのである。この相手は桁違いなのだ。巨体の男はゆっくりとACCT部隊の方へ歩き出した。このまま逃げおおせるつもりであろうか。

……しかし、もう一人桁違いな者がいる。

店内から飛び出してきたイツはブーストを使用し、つまりリミッターを解除して、一気に巨漢との間合いを詰めた。

巨漢はイツの接近に気が付き、その蹴りを腕で防御しようとする。しかし、今度のイツのパワーは圧倒的であった。直撃した瞬間、巨漢の腕がへし折れ、砕け散った。攻撃する箇所を一点に集中し、そこだけに力を叩き込むコンセンション・アタックは、イツの得意とするところである。

そしてもう、巨漢に反撃する間などありはしない。先ほどのイツの速度とは比較にならないスピードなのだ。

強烈な正拳突きが決まった。

巨漢の胸板に巨大な風穴が開いた。

巨漢は動かなくなり、そしてゆっくりと崩れ落ちた。

勝負自体は本当に短いものであった。

「こちらイツ。ナギサ、終わったぜ」

「こちらナギサ、了解。すぐ行くわ」

イツは崩れ落ちた巨体の身体をチェックし始めた。

「軍用のパーツじゃないのか、これは。どうだった」

そこへ、一人の男が近寄って来た。A C C Tの隊長、エヴァンスである。

「おい、若造。勝手に触るな」

「あー、オッサンか。こいつはおれの獲物だぜ。どうしようと俺の勝手だろうが」

二人はお互いを知っている。同じような場面を何度も経験しているからである。そして、いつも衝突している。

「公務執行妨害だからな。速やかに立ち去れ」

イツは不服そうな顔をした。

「おいおい、礼を言われることはあっても、咎められる筋合いはねえぜ。あんたらじゃ、どうにもならなかつたろ」

「お前の研究所でどんな研究をしようが、勝手に調べられちゃこまるんだよ。データは後で送ってやるから」

「ケツ、指名手配中の連続殺人鬼を退治してやったつてのに、ひでえ話だぜ」

イツは壁を背にして立ったまま、ナギサの到着を待った。彼はそうしていると言っている。現場はだんだんと慌しくなってきた。何やら白衣の人間もちらほら見える。A C C Tの研究者か、科学者か。いずれにしても、彼らは公務員。自分はさる研究所のエンジニアにすぎない。

それから少しして、一人の女性がやってきた。彼女がナギサである。外見だけ見れば、とてもクールな印象を与える女性だ。

「ナギサ、A C C Tのオッサンが何もさせてくれないぜ」

ナギサは例の巨漢の死体をちらりと見て言った。

「まあ、いつものことね」

「今回のターゲットはかなりキナ臭いんだけどな」

イツは思った。あの頑丈さと脚部パーツの性能はこれまでの犯罪者とは一線を画していた。軍事用に利用できるレベルのものだった。「データはあとでなんとかするとして、とりあえず動画を解析した

いし、もう帰りましょう」

「チツ、なんかしっくりこねえ」

スクラップになった車や乗り捨てた車も結構あるし、ところどころ破壊されているために、道路は機能していないので、彼女の車はずいぶん離れた場所に停めてあった。

「あーあ、腕のパーツがちょっと痛んじまった。メンテしなきゃな」

二人を乗せた車は、闇を振り払うかのように走り去るのであった。

- F I N -

(後書き)

……いつか連載で書きたいなあ、なんて思っております。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7095c/>

---

Cyber Arms - Test Ver .

2009年7月2日03時58分発行